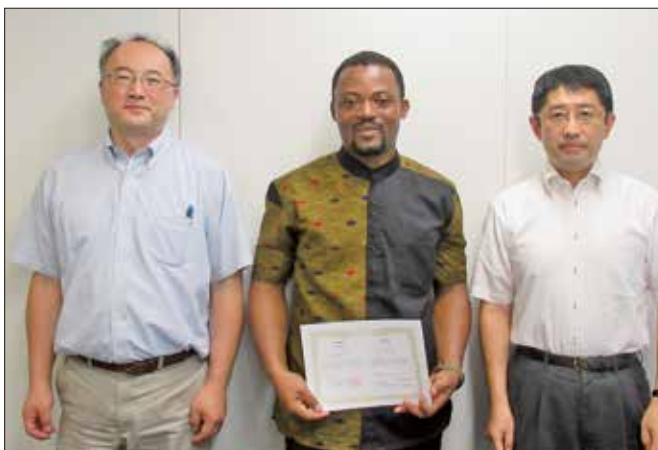


インターンシップ報告

ERINA は、北東アジア地域経済の発展の促進や日本と地域の協力の強化に向けて、情報を発信し、調査研究や経済交流事業に取り組んでいる。北東アジア地域経済を専門とするシンクタンクとして活動する中で、その専門的な知識やノウハウを社会に還元すべく、研究業務に従事する機会を提供するとともに、北東アジア経済に対する理解を深める目的で、大学院生をインターンとして受け入れてきた。インターンシップの受け入れに際しては、調査研究部の研究員がメンターとして指導し、研究上の相談に応じている。

2003年にこのインターンシップ事業を開始して以来、すでに数多くの日本人および外国人のインターンシップを受け入れている。新潟大学、国際大学、東京大学、島根県立大学、モンレー国際大学院、モスクワ大学など様々な場所から大学院生が ERINA に滞在し、研究業務を体験している。また、彼ら／彼女らの専門分野も、現代社会、国際関係、経済、環境、自然科学と多岐にわたる。

今夏は、西アフリカのトーゴから国際大学（新潟県南魚沼市）に留学しているダケ・ロロツジ・セナ（Sena Lolodudzi DAKE）さんをインターンシップとして3カ月間受け入れた。セナさんは大学で日本のアフリカ地域への国際開発協力を中心に国際関係論を研究している。今回、様々な調査研究手法等を学ぶため、ERINA のインターンシップ・プログラムに応募し、受け入れた。メンターとなった三村光弘主任研究員の指導の下で、モンゴルの経済発展を事例に日本の開発協力について調査研究し、その成果を ERINA で報告した。



ERINA を通して見た日本

私の名前はセナです。西アフリカのガー

ナとベニンの間に位置する小国トーゴ出身のアフリカ人です。私はトーゴの外交官として5年以上にわたって日本との協力窓口

を担当してきました。2020年9月からは国際協力機構（JICA）からの奨学金支援を受けて、国際大学国際関係学研究科マ

スタープログラムで日本の国際開発協力を学んでいます。

私が日本を大好きになったきっかけは、5年前の2016年9月から2017年5月に、国際交流基金が開発途上国の公務員向けに主催した日本語学習プログラムの枠組みで大阪を訪れたことでした。それからというもの、私の人生にはこの素晴らしい日本列島への情熱に関する、驚きと魅力にあふれたたくさんの思い出が綴られるようになりました。今年の夏には、そこにERINAの思い出が追加されました。それをここで皆さんへお伝えしたいと思います。

そうです、ERINAです！素敵な響きですね。でも、女性の名前ではありません。環日本海経済研究所（ERINA）は新潟市にある権威ある研究機関です。光栄なことに、私は7月1日から9月30日までここでインターンシップ・プログラムに参加することができました。このプログラムは、学生が調査研究能力を高めることを支援することを主な目標としていますが、それだけでなく、この3カ月は私にとって日本社会をより深く理解するとともに良い機会となりました。言うならば、ERINAのある「朱鷺メッセ」という新潟市で一番高いビルから日本を様々な視点で俯瞰することができました。

ではこれからERINAでのインターンシップの経験を3つの視点でお話します。

専門家としての視点

私は、日本に留学する前にも、日本人と一緒に働いた経験があります。日本からODAコーディネーターとしてトゴの外務省に派遣されたJICA専門家のアシスタントとして働いたことがありますし、日本大使館やJICAとも交渉を行った経験もあります。それでも、日本人の勤勉さというのがどういものであるかを本当に理解できたのは、まさにERINAでのインターンシップ研修中でした。日本で職業人として過ごした時間は刺激的で素晴らしい経験となりま

した。私自身、専門的スキルを向上させ、日本が大事にしている価値を自分の中で高めることができて感じています。それは、時間厳守や効率を大事にすること、責任感や自主性、そして謙遜や謙虚さといったものです。トゴの職場と比べてERINAの職員、特にリーダー達は気取りがなく謙虚だったことにとても驚きました。ですから、誰が上司で誰が部下なのか判別するのが難しかったほどです。ここから学んだ最も重要な教訓を母国に持ち帰ろうと思います。それは、日本では、器の大きさということです。謙虚さのことであり、自分がどれだけ社会に役立つかが一番大切だということです。スキルや知識、社会的階級に関わらず、これら全てを「謙虚さ」の中に小さく包み込んで、社会をより良くするために一生懸命働かなければならないのです。

学生と研究者見習いとしての視点

私は、当初思っていたERINAでの目的を実現できたことに喜んでいました。調査研究の手法を学び、修士論文に集中して取り組むことができました。そのおかげで私の研究は大きく前進し、より良いものになりました。コロナ禍にあって多くの学生がインターンの機会を持っていない中で、研修に参加できたことは実に幸運だと思います。

インターンシップ以前は、私が北東アジア諸国に関して持っていた知識はとても限られていました。今は、ERINAが研究対象地域としている6カ国への理解が深まっています。日本の研究者が北朝鮮の研究者と良好な関係を築いていることを知り驚きました。両者は協力して調査研究に取り組んでいます。私のメンターは北朝鮮で現地調査を実施していますし、ERINAには北朝鮮の研究者が執筆した論文がたくさん保蔵されています。こういったことを知ることができて、とても興味深く感じました。また、私のインターンシップの成果報告会では、日本とモンゴルの経済関係についての

プレゼンテーションを行いました。北東アジアに精通することを示す良い経験となりました。

「日本ファン」としての視点

残念ながら、自分の仕事に集中しすぎて新潟市を楽しむ余裕はありませんでした。よく知ることができた場所としては、朱鷺メッセ、滞在したゲストハウス、万代橋付近のイオンモール、そしてイトヨーカドーに限られます。ここで日本人の印象について聞かれたら、これまで日本各地を訪れてきた中で、関西の人達、特に大阪の人が一番フレンドリーだったと答えるでしょう。それでも、日本海の沿岸で戦略的な位置を占め、北東アジア諸国の経済統合達成への希望と意欲を高めるこの素敵な都市に巡り合えたことを嬉しく思います。

私は新潟で、これからも新潟と交流を保ち続けたいと思わせた2人の新しい友人を得ました。彼らのおかげで私の新潟滞在は退屈とは無縁のものになりました。1人目は私が滞在したゲストハウスのオーナーです。90日間にわたってオーナーと一緒に過ごしたことで、彼は父のような存在になりました。一緒に夕飯を食べ、冗談を言って笑ったりしました。彼は72歳ですが、私が卒業したら一緒にトゴに行く予定です。英語で会話はできませんでしたがとても親しくなったので、ゲストハウスをチェックアウトするときに涙をこらえきれないかもしれません。もう1人の友人は、ビジネスマンで、私と知り合ったことでトゴへの投資に興味をもつようになりました。これもまたERINAでの経験が実りあるものであった証です。

以上が、この夏の、私の大好きな日本についての感想です。

（国際大学国際関係学研究科
ダケ・ロロヅジ・セナ）